

天野 卓郎 著

## 『大正デモクラシーと民衆運動——広島県域を中心として——』

相 良 英 輔

一

大正デモクラシーについての著書は多彩であり、特に最近では鹿野政直著『大正デモクラシーの底流』（日本放送出版協会）などのように、従来の視点と異なった分析方法を用いた研究成果も公刊されている。しかしながら、本書のように広島県域を対象にした大正デモクラシーについての著書ははじめてであり、地方史研究の発展に果たした功績は大である。さらに本書は、日本における大正デモクラシーの研究を視野に入れながら広島県域に限定して分析しているものであり、地方史から中央史への提言にもなっている。著者は、広島でまだ近代史研究がほとんど進んでいない時期にこつこつと研究をつまれば、広島県における近代史研究の草わきの存在となられた。

評書

本書は、著者が永年の研究過程で発表されてきた論文の中から大正デモクラシー期の広島県域での民衆運動に関するものを選んでまとめた論文集である。論文集とはいえ、もちろん民衆運動論で一貫した著書となっている。著者は、若い時期教育現場で奮闘しながら孤独な研究を続けてこられた。筆者は、当時広島にほとんど近代史研

究者のいない中で、著者が教育現場で奮闘しながら次々と論文を書かれていったところに逞しい研究情熱を感じる。また、本書を読みながら、研究における先達の苦闘を垣間みる思いがした。さらに著者は、沢原俊雄氏（呉市）所蔵の新聞資料（『芸備日日新聞』、『中国新聞』など）を最初に閲覧しており、このような著者の資料発掘の努力も見逃がすことはできない。筆者は、大学院学生のあるころこのような著者の活躍を時々先学から聞いており、また、筆者が大正デモクラシーの小論を書いた時、著者の論文を何本か読んでいたこともあり、いささかの感慨をもってこの著書を読ませていただいた。

さて、本書の論述内容の構成をみると、本書は「大正デモクラシーそのものの論究を試みるものではなく、地域の小商工業者・労働者・農民・被差別部落住民など無産大衆の問題をめぐってその分析を進めて」いる。分析の前提として、著者は「まえがき」で今日までの学会における大正デモクラシー研究の主要論点について言及し、「問題点の一つは、町や村の地域レベルにおける政党政治の意義、民衆運動の性格といったものをどうとらえ、近代日本の政治経済的・社会的背景、あるいは民主主義的思想の基盤をいかに解明するか

ということにあるように思う。」と述べている。この問題点の解明のために本書は、地域の小商工業者、労働者、農民、被差別部落住民など無産大衆の思想・運動の分析を進めている。また、著者は次のように言う。「大正デモクラシー運動では、自由民権運動をしのごうく広汎な民衆の盛りあがりを示し、そのエネルギーは「一つの歴史的個性をもつ時代」を形成していった。しかし、それはファシズムにおしつぶされて戦後民主主義へとつながれていったが、その歴史的課題はなお解明されないまままできている。この課題を町や村の地域における民主主義の発展という視角から究明しようとしたのが、本書の意図したところである」。それでは、具体的に本書の内容を紹介しながら、いささかの感想を述べてみたい。

## 二

一の「政治的自由獲得運動の発生」では、まずはじめに、1「講和条約反対運動」について言及している。著者は、講和条約反対運動のおこった原因を次のようにみる。すなわち戦争による増税、国債の半強制的おしつけ、物価高騰などによって国民生活が破壊されたことにより、国民は「講和条約が結ばれば、莫大な償金の獲得により貧しい生活もいくばくか潤うであろうとの期待」をもったが、「交渉が開始されると、ロシアの固守する講和条件と日本国民の戦争による犠牲・負担からくる期待との間にあまりにも大きな隔たりがあることが明らかになった」。このことから「講和反対運動」は展開するとみる。よって「極度の貧困問題と熱狂的な戦争支持の心情とは、決して無関係ではなかった」という。一応納得できるのであるが、このような新聞記事を基にした社会状況の描写には今一つものたりなさを感じる。資料的制約のあることではあるが、国民生

活の具体的窮状は、社会構造的な分析がほしい。「反対運動」は、呉市の「市民大会」で口火が切られ、主催者である在呉新聞記者団は、その後も何回かの「市民大会」を開催している。呉には海軍工廠があり、その職工数は三万数千人といわれる。このような社会構造を背景に呉市は「反対運動」の先進地となったと思われるが、もっと詳細な呉市の社会構造とその変化を知りたいものである。また、反対運動は全果的な高まりをみせたといわれるが、都市民も山間農村民もともに同じような意識のもとで、同じような運動形態をとっているのだろうか。この「運動」は、芸備日日新聞、中国新聞などの記者団や早速正爾を中心にした革新倶楽部の指導によって展開されているが、直接的には利害の関係しない「講和問題」に、都市、農山村を問わず、数千人の人々が結集するというそのエネルギーの源泉について、筆者は今一つ理解しかねるところがある。

2「民衆運動の抬頭」では、都市商工業者の営業税賦課に対する反対運動、農村の共同苗代強制反対運動、呉海軍工廠労働者の争議などを事例にして、日露戦後の「大衆運動」を分析している。共同苗代強制反対運動については、児玉昭男氏の業績（『史学研究』一二六号）「共同苗代反対運動について」などがあり、呉の労働運動史についてもすでに先学の業績（天野武士著『呉労働運動小史』など）がある。しかし、広島市の都市商工業者の「悪税反対運動」については、安藤福平氏が「日露戦後の広島市における民衆運動」（『芸備地方史研究』一一〇号）で言及している以外に本格的な研究の存在を筆者は知らない。特権資本家に対する地方の非特権商工業者の対抗などを問題にしながらもつとて言及してほしかった。

3「第一次憲政擁護運動」では、大正初期の「護憲運動」と、営業・通行・織物三税の「廃税運動」をとり扱っている。4「民衆運

「動の展開」では、呉市の電気料・地料値下げの民衆運動、福山民声会の市民運動、県予算膨張反対運動など、さまざまな民衆運動について分析している。いずれも大正初期の民衆運動であるが、広範な民衆の活発な活動の中に大正後期の労働運動・小作争議の胎動をみる思いがする。

## 三

次に二の「米騒動」についてみてみたい。この論述は二十数年前の研究業績に基づいているが、法政大学大原社会問題研究所の「細川嘉六集蔵・米騒動関係資料」、「広島県下騷擾事件顛末概要」、「予審終結決定書」などを中心に分析したものであり、米騒動の生々しい実証になっている。しかもいまだ著者の研究をこえるものはなく、貴重な研究業績となっている。あえて注文をつけるならば、米騒動に参加した人々の農村・都市の構造的分析がほしい。「飯米にも事欠く小作貧農層は米価騰貴によって大きな痛手をうけるのである」とか、「生活費の大部分が食費、米代である労働者にとつては、米価の高騰はとうてい堪えがたいものとなっていた。まして統計表にあらわれぬ「細民」とか「下層民」といった半失業の労働者にとつてはなおさらである」ということによつて、米騒動の起こつた原因を理解することはできるのであるが、米騒動の起こつた当時の社会構造がいかなるものであったか、またこれら米騒動に参加した人々が農村や都市で社会構成的にどのような位置を占めるのか、農村ならば土地所有などの実態、都市ならばその職業構成などを知つたうえで、米騒動参加者はどのような階層の人々が中心で、それがその地域でどれほどの比率を占めるかなど概略知りたい。「細民」とか「下層民」と表現される人々が村や都市でどれくらいの比率を占

めるのかも重要である。表2-6「米騒動検査者の職業・生活状態」（安佐郡可部町）は、米騒動参加者の一端を知らせてくれる優れた資料である。可部町における米騒動の参加者は、「馬車挽・人力車夫・船頭（川船）・大工・下駄職・靴直し・川漁・日雇人夫など半プロ層の労働者をもつとも多」いことがよくわかる。筆者は、これらの人々が可部町全体の中でどのような位置を占め、どれほどの比率を占めるのかを知りたい。そのために可部町全体の社会構造、職業構造を示してほしかった。それは、三次町や呉市の場合でも同様である。また、六十五頁に大正六年末から翌年はじめにかけての呉市における労働者家庭の状況として、「物価騰貴のため貧困家庭では麦飯弁当は勿論全然持たない児童百五十名を算し雑炊を食事に帰るもの日に増加」と資料を引用しているが、百五十名が何%を占めるのか気になる。同じ資料の引用で、「日々の生計に困窮せる所謂貧困者或は既に公費その他の救助をうけつゝあるもの」の調査結果の数字も同様にその比率が重要ではないだろうか。

## 四

三の「普選運動の展開」の1「普選運動の高揚」では、まず「地方都市・呉市を中心とした第二次護憲運動・普通選挙権獲得運動の展開を検討し、その実態を明らかにする」ことを目的としている。そしてまず、県内各地に青年政社が結成されていることに注目し、「近代民衆運動がはじめて全国的な規模をもつて大衆の中に根をおろしていった」とみる。

2「普選同盟会の活動」では、具体的に呉普選期成同盟会の分析をすすめている。この組織の中心人物のほとんどは、「第一次護憲運動以降、地料・電気・ガス・家賃その他物価の値下げ要求を結集

し、また米騒動では米価問題市民大会を開催するなどした市政改革運動の活動家であり、地域における対地主・反ブルジョア運動の先頭に立ってきたものである」として、一九名の名前と職業を紹介している。筆者がここでもっとも知りたかったのは、こうした地方運動指導者の思想である。彼らは中央の指導者の思想に対してどれほど独自性を持っていたのであろうか。また彼ら独自の発言、あるいは地方独自の発言があるのだろうか。このような地方運動家の考えを示すような資料の発掘は難かしいであろうが、重要なことのように思う。この項の注にそれに類する資料が示されているが、これらの資料の分析を試みる必要もあるのではないか。呉地方における大正デモクラシーの理論的指導者の思想的輪郭を知りうる資料の発掘ものぞみたい。また、地方政党の組織の実態についても、もっと詳細に知りたいところである。

3 「普選問題と労働組合」でも、友愛会呉支部、呉労働組合は短期間のうちに消滅してしまうため簡略な記述になっているが、こういう組織は運動の核となるものであるから、その性格や運動はもっと詳細な記述がほしい。

## 五

四の「労働問題と労働運動」の1「第一次大戦期の労働問題」では、簡潔に広島県内の産業構造と労働力供給地としての特徴を記している。「広島県はもともと、農家一戸あたりの耕地面積が狭く、海外移民をはじめ他府県への出稼ぎの多いことで知られていた。その中心は出稼女工であった」という。農家一戸あたりの耕地面積の狭少なこと、移民、出稼ぎの多いことに言及するだけでなく、移民史、経済史の研究業績を援用しながら、零細な小作・自小作農民

の生活は、出稼ぎ女工の収入あるいは海外移民の送金によって補填されてはじめて可能であったことをも記述してほしかった。

2 「労働組合の組織化」では、米騒動の翌年、印刷工・製針・洋服工や屋外労働者・軍需関係工場の労働者などの組合があいついで結成されていった」が、「協調主義的なものが依然として多数を占めた」ことなどを強調している。労働組合については、組合の性格と実態をその日常活動を含めて具体的に知りたい。組合の日常活動を含めた実態の中におのずと労働問題と労働運動の問題点を見出しうると思う。

3 「労働運動の発展と無産政党」では、具体的な労働争議と無産政党の組織化について記述している。表四一七には、大正三年から同八年までの労働争議一覧をのせ、簡単な分析をしている。大正六年七月の大阪鉄工所因島工場（五九〇〇人）の職工五〇〇〇人による賃上げ要求の大半争議や、同八年五月の福島紡績福山工場での朝鮮人女工二〇〇〇人余による日本人監督虐待抗議ストライキ、八年十月の呉海軍工廠砲煩部職工二五〇〇人による差別待遇改善要求ストライキなど、注目すべき争議が多数列記してあるが、単に争議の日時、参加人数、原因、要求の簡略な記述だけでなく、一つ二つを例にしてもっと具体的に詳細な内容を知りたいものである。争議内容を詳細に記述することによって、日本資本主義のかかえる矛盾をもみることができのではないだろうか。もっとも資料的制約もあるであろうが、県内無産政党については、くわしい無産政党組織系統図を載せて概略説明している。このような系統図は、はじめて県内の無産政党を学ぼうとする者にとって理解しやすく、便利である。ただ、呉工廠海工会を支持基盤として発足した呉独立民衆党や、県内最大の総同盟因島労働組合を基盤とした社会民衆党支部などについて

は、その組織の性格・実態・政党活動など今後明らかにされねばならないであろう。

4 「昭和恐慌と労働運動の展開」では、昭和恐慌下での市民生活や失業者の実態、恐慌下の労働争議の性格、労働組合の右傾化、家賃値下げ運動などの市民闘争をとりあげている。表四—一二には、大正十二年から昭和十二年までの「労働争議件数」が「同盟罷業」と「罷怠業ニ至ラサル争議」にわけられ、詳細に掲げられている。ここでは、せつかく表に大正期の争議件数も載せているのであるから、大正後期と比較しながら昭和恐慌期の労働争議を分析してもらいたかった。そうすることによって、昭和恐慌期の労働争議の特徴は一層明確に認識されると思う。

## 六

五の「農村問題と農民運動」の1「農民の状態」では、広島県の一戸あたりの耕作面積は全国平均に比してはるかに小さいという特徴の中で、日露戦争以後、小農民がますます窮状に陥っていくことを論述している。小作慣行については、「刈分小作」や「作り子」など山間地の「はなはだしく前期的な慣行」を紹介しているが、むしろもつとも一般的な小作慣行の形態と経営状態を具体的に例示すべきではないか。あるいはまた、村別の「小作慣行ニ關スル調査資料」があるのであるから、地域的、形態別に類型化してその特徴をみることもできる。

2 「農民組合の組織化」では、世羅郡神田村（現・賀茂郡大和町）の上岡利夫を委員長として結成された神田農民同盟、この組織とやがて合同していく芸北小作民団、宇品小作組合の争議などについて論じている。神田農民同盟については、「農民同盟結盟宣言」の主

要部分を紹介しているが、注目すべき「宣言」と思う。特に「農村問題を解決するものは、他力にあらずして農民自身の力に俟たなければならぬ。」という文章は、「水平社宣言」を思いおこさせる。神田農民同盟については、すでに『全農広島県聯合会十四年苦闘史』に記されているようであるが、門外漢の筆者も興味をそそられる。

3 「小作争議の本格的展開」では、大正末から恐慌前までの小作争議について論じている。「広島県内の小作争議は、いわゆる先進諸県のそれに比すればけつして活発であったとはいえない。」としながらも、昭和二年の「第四回地方小作官会議ニ於ケル諮問事項ニ対スル答申要録」によって、「地主側が守勢にたたさされている」となどの特徴をあげながら、「総じて小作人の権利意識の高揚」があったとみている。

4 「昭和恐慌と農民運動の展開」では、昭和恐慌における悲惨な農漁村の実情をみ、さらに小作争議では地主側の攻勢傾向を指摘している。小作争議の展開は、時期的に段階を設けて分析し、それぞれの特徴を明確にしてくれば理解しやすい。もちろん著者は、小作争議の段階と特徴を明示すべく、「3」では大正末から昭和初期をとりあげ、「小作争議の本格化」と題して小作人側の攻勢と「権利意識の高揚」を強調しており、「4」では昭和恐慌以後を扱い、小作争議も「地主側が攻勢に出る傾向がめだつようになった」ことを指摘している。しかしながら「3」でも、争議の原因の一つに「地主の土地引上げ」をあげ、小作人の要求に「永小作権」があることを指摘している。これらは地主の攻勢、小作人の守勢の判断材料になり、読者は「3」での小作争議の特徴をつかみにくい。論述の過程で、小作争議の原則的な段階と特徴を明確にしてくれた方がよいと思う。また「4」で、小作争議において小作人側の守勢を指摘し、

農民運動の分裂を記述する中で、「農村の疲弊を背景とする農民運動の高揚は地主支配をゆるがし、さきの双三郡各町村の町村民大会にみられるように民間の救農運動を沸騰させた。」と記しているが、農村疲弊の中で一般的に農民運動は後退するのではないのか。農民運動を高く評価する著者の思い入れがあるようで、いささか誤解をまねきやすい表現に思える。さらに続いて、「なかでも右翼や軍部ファシストたちに鋭い危機感を与えた。」と書くのもいかに唐突である。軍部ファシストの「危機感」による農村への注目と、前述してきた農民運動とは全く相入れないものであるから、同時に記述されると読者はとまどうのではないか。筆者は、農村疲弊の中で小作争議は小作人側の守勢となり、全農民組合の分裂などによる農民運動の後退の中で、官制の「農村経済更生運動」が発足し、その中で「皇国農民」が養成され、「農村のファシズム的再編成」がなされたと理解したい。著者もそのような理解のもとに論述しているようにも思えるが、ここの記述はやや理解しにくいのではないか。

## 七

六「部落問題と水平運動」の1「部落差別の実態」では、大正七年の内務省調査「全国細民部落概況」により、「広島県の被差別部落数は全国第二位」であること、その規模をみると、「全国有数の規模といわれる広島市の二部落を除けば、戸数規模の小さい部落の多いことが特徴的である」とし、さらにその職業別戸数・人口では、「県全体では農業の割合が四六・二%を占めてもっとも高く、ついで力役・雑業、漁業、工業となっており」、「商工業の展開している都市部を中心に力役・雑業など不安定な生活階層者がひじょうに大きな比重を占めている」と指摘している。まず気にかかる点を指摘

しよう。被差別部落について著者は「農村部では農業従事者が多数を占めるものの、土地所有が小さいためか、副業をもつものが多い」というが、筆者は、当時の農業従事者のほとんどは副業をもって生計を補っていたと理解している。農村における被差別部落民の厳しい状況は、もっと他に拠って説明していただきたかった。できうるならば、被差別部落農村の一例を示して多角的に分析してほしいものである。ところで、全国水平社の結成される以前の大正十一年二月、「佐伯郡・安芸郡の南部瀬戸内一円の部落大衆を結集し、部落解放をめざす組織島嶼連盟を結成した」という。この組織は、一年後に「部落同志会」の名のもと集会を開いている。組織の性格は共鳴会と水平社の「中間的性格」をもっていたようであるが、この地方における独自の組織として注目すべきものであり、もっと詳細な実態を知りたいものである。

2「広島県水平社の創立」では、「福島一致協会」の設立から「広島県水平社」の結成までを記している。「福島一致協会」は、それが地域的改善運動の限界をこえていかなかったとしても、広島県に独自に生まれた組織であり、その実態についてもっと分析してみてもよいのではないか。さらに広島県水平社の運動については、「徹底的差別科擲の戦術に対し、生活的な経済要求を基礎として運動をすすめるべきであるという提起が青年たちの間からおこり」、「青年同盟を中心として展開されて」いるという。また、大正十二年に結成された全国水平社青年同盟の広島支部は、広島青年革進会がその母体であるという。この組織は「社会改造」をめざした思想的結社であるというが、そのくわしい実態はわからないのであろうか。いささか興味を持つ。

3「水平運動の発展」では、国や県に部落問題解決の意欲がそれ

ほど感じられないなかで、「広島県水平社連合会の組織は、昭和三〇五年が結成以来の最高を示す」とし、広島県連合会は権力側の人権侵害に対する闘争には特に力を入れたことなどを記述している。

4 「部落委員会活動の展開」では、水平社が「運動論の極左的偏向や欠陥（全国水平社解消論）によって昭和七年の全国大会を開くことができなかった」こと、そうした状況の中で、「被差別部落住民の多様な日常要求を封建的身分的差別的糾弾と結合させ、それを大衆闘争として展開させていく」部落委員会活動を分析している。

「部落委員会活動を基礎とする差別糾弾闘争は、たんに差別的糾弾にとどまらず、「差別を助長する」要因に目を向けたものであった」が、「差別事件が発生すると、差別糾弾闘争委員会を設け、その解決条件のなかに啓蒙委員会または、研究協議会の設置を位置づけ、事件を一時的なものに終らせていない。しかも農民組合などの共闘団体を加え、改善施設の要求と結合させて運動が展開されている。ここに広島県連合会における部落委員会活動の大きな特徴があったといえよう」と論述している。この部落委員会の優れた運動論は注目すべきものではなからうか。ところで、日中戦争が勃発し、太平洋戦争へと展開するなかで、そうした日常闘争も衰退していったようである。水平運動の結末の部分は記述していないが、やはりこのようなにして組織が消滅していったかは記すべきではなからうか。

さて、いま本書を最後まで読み終え、全体を顧みてみると、著者の論述は地方における民衆運動に光をあてようとしていることで一貫していることが理解できる。著者は「三」の冒頭で近代民衆運動の研究について言及し、「大都市における運動の先進的要因が強調されるのに反し、地方の都市、農村の困難な条件のなかでの中央的運動にみられない側面が見落されがちではなからうか」といい、さ

らに「運動の性格評価は、一部の進歩的指導者や中央の激発形態だけをもってしては一面的にしか過ぎまい。中央の先進的運動は地方の農村の形態に影響を与え、また、逆に地方の運動を支えられて、それと一体的に結びついてこそ、真にその効果と発展を期することができる」という。ここに著者の一貫した問題意識があると思う。

ただし、大正デモクラシー期の民衆運動をリアルに構造的に把握するには、金原左門氏の「大正デモクラシーの社会的形成」のような分析方法を導入することが必要ではないかとあらためて痛感する。著者は、二四四頁の注(22)で金原氏の著書について「地方農村社会における農民諸階層の動向を大正デモクラシー状況という視角から、独自の分析方法で論証したもの」と評価している。金原氏の分析方法をとり入れた著者の論文をぜひ読みたいものである。いま一つ、鹿野政直氏が「デモクラシーがあればどうみてもやかに凋落していったのはなぜか」と問題提起しているが、この問題に対する検討も必要ではないだろうか。著者が、デモクラシー運動を手放しで賛美しているのではなく、冷静に分析しているのは勿論であるが、デモクラシー運動のマイナス要因にもメスを入れてほしいと思う。

以上、近代史研究の先達に失礼をも顧みず、むこうみずな批評をしてきた。筆者の浅学により誤解している点も多々あると思う。御寛恕を乞うしだいである。

(雄山閣出版、一九八四年二月刊、三〇四頁、三八〇〇円)